

「ゲリラ雷雨」で問い合わせ・販売数が増加 今年の夏は雷害対策を究める

落雷件数が増加した昨年以降、情報通信機器を誘導雷から守る雷サージ防護製品「SPD」が売れている。雷対策を、PBX販売、ネットワーク構築の付加価値アップにつなげるディーラーも出てきている。

文 坪田弘樹(本誌)

「ゲリラ雷雨」という言葉がすっかり一般的になった2008年夏。土砂災害や洪水、交通網の麻痺を報じるニュースが世を騒がせたが、被害は必ずしも屋外に限ったものではない。オフィスや家庭内に目を移せば、電話やPC、サーバーなどの情報通信機器が雷による異常電圧の犠牲になる可能性も高まる。

気象庁の調べによると昨年、例年に比して雷日数(雷が観測された日数)が特に増加したのが関東地方だ。東京都では7~8月の2カ月間に、06年(7日)の2倍強、07年(5日)の3倍となる15日を観測している。

被害を報じるテレビ番組等の影響



昭電
事業推進部
事業推進課 課長
相澤敦氏



昭電のネットワークケーブル用SPD新製品「SRP-TB-CAT5e」。CAT5eケーブルで使用できるほか、PoEにも対応。ネットワークカメラシステムの雷害対策にも適している

もあり、雷害対策製品に関する問い合わせが急増、販売台数も増加傾向にあるようだ。雷サージから情報通信機器を防護するSPD(Surge Protection Device)製品「サンダーブロッカー」シリーズ等を製造・販売する昭電では昨年、問い合わせ件数、売り上げが共に大きく伸長。ディザスタリカバリやBCM(事業継続マネジメント)の観点から、雷保護システムの導入検討を始める企業が増えているという。

同社の事業推進部・事業推進課の相澤敦課長は「電源系の設備に比べて、あまり対策がなされていなかった通信系の設備に、雷保護の対策をするケースが増えている」と話す。

事業遂行に欠かせない機器が使用不能になるだけでなく、LAN内に被害が及べばサーバー内の重要デ

ータの損失等も招きかねない雷の被害。通信系ディーラーやNierも、その対策に関わる知識を身につける必要がある。

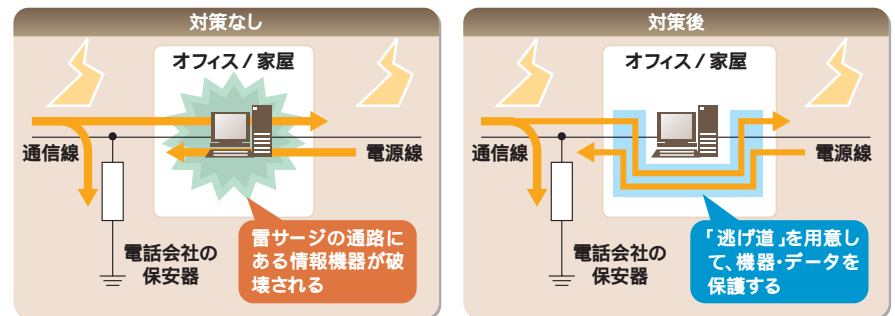
重要なのは「入口と出口」

まずは雷の被害と対策について整理しておこう。

雷の防護は、建物自体を直撃雷から守る外部雷保護システムと、近隣に落ちた雷の影響(誘導雷)で電源線や通信線等から建物内部に流れ込む雷サージ(異常電圧・電流)から機器を守るサージ防護に分けられる。ここでは後者について説明する。

雷サージが建物内部の機器を破壊する仕組みと、その対策を示したのが図表1だ。侵入した雷サージは、電圧の高いほうから低いほうへと流れる。電源線から通信線へ、あるいはその逆へと出口を求め、したがってその通り道に位置する機器が破壊されることになる。通信・放送設備

図表1 昭電の雷サージ防護デバイス「サンダーブロッカー」の仕組み



出典:昭電資料を一部改編